視点・論点⑤

12期の「三つの課題」――あらためてのスタートにあたって

天野恵一

選挙の大敗北を大きな契機として、勝手に　自爆　した天皇主義右翼安倍政権。その後、あわただしく成立した福田政権は、なんとか自民党人気をとりもどそうと、安倍カラーとは別というイメージを打ち出して走り続け、民主党代表小沢一郎と「大連立」の合意を一時的にとりつけるという大胆な政治をも展開してみせた。しかし、福田政権固有のカラーというえる政策は、実はほとんど示されず、安倍がやり残した自衛隊のインド洋・ペルシャ湾での米軍への給油活動の再開強行によく示されるように、アメリカ（軍）に主体的に追従する軍事強化（派兵国家化）という基本路線に変化はない。また、経済政策では、「格差社会」日本の非難に応えて、部分的な政策変更による「貧困」への対応という「ソフト」なイメージを打ち出し、格差推進の小泉・安倍との違いの演出はしてみせているものの、資本の国際競争力強化のための、大企業保護優先（労働者切り捨て、庶民生活破壊）の「新自由主義（ネオリベラリズム）」路線に変更はまったくない。その基本的路線に変更がない点を隠蔽するために、福田政権は「ソフト」なイメージで表面的には「修正」路線を走っているかのごとくとりつくろうという曖昧政治を全面化している。

しかし、すさまじい防衛汚職にまみれた「米軍再編」の実態が明らかになり、「年金」問題の処理（解決）能力なしという事実もハッキリし、イージス艦（あたご）が漁船を沈めてしまうという「衝突事故」をめぐる防衛省トップらの、信じられない無責任な対応。福田政権の「無責任」ぶりも連続的に明らかになり、支持率は、安倍政権末期同様という状況である。原則的なところで対立政策を持っていない、もう一つの改憲政党である「民主党」に助けられて、福田政権は、かろうじて延命し続けているのだ。

こうした状況下で、私たちは第一二期をスタートさせなければならない。「呼びかけ文」で、私たちはこの期に担うべき、三つの課題を提起した。ここでもそれを確認しておこう。

まず第一は、「米軍再編」各地の抵抗運動を結んで、汚職まみれの「米軍再編」（沖縄基地づくりとグアム移転との対決が、私たちにとってはメインの持続的課題）をトータルに批判し、安保条約を超えた日米安保同盟の飛躍的強化を問い続ける運動づくり。

第二は、民主党もまきこんでつくられようとしている恒久派兵（法）体制を軸とした「戦争国家（派兵国家）」づくりと、ＰＡＣ３配置などに反対している地域の人々と結んで、持続的に対決する。それは必然的に、平和憲法破壊の「改憲」策動（三月には中曽根康弘を会長とする会見のための「新憲法制定議員同盟」が民主党をまきこんだ新体制で動き始めている）と闘う大きな動きと運動的に合流していく努力へと連動していくだろう。

第三は、今年七月に開催される洞爺湖（北海道）Ｇ８サミットに、反自衛隊（軍事）をテーマとする対抗的な集まりをつくりだす、という課題である。私たちは、すでに北海道―東京をつないで、こうした集まりをつくりだすために動き出している。反グローバリズムの多様な活動を担っているグループの協力をもあおいで、そうした集まりをなんとか実現いきたい。

こうした三つの課題（一つ一つがとてつもなく大きな課題であるが）を軸に、私たちは走りつづけないければならないと考えている。

三月二九日・三〇日には呉で反派兵の全国合宿がもたれる。ここで私たちのメイン・テーマも広く論議し、全国的な連携をあらためて確認していくつもりである。

また、恒久派兵（法）の具体的批判というテーマにしぼりこんだ集まりをつくることで、第一二期をスタートさせたらどうか、という方向での討論も進んでいる。

正直、私たちは課題の大きさ、多様さに押しつぶされそうな状態である。しかし、走り続けることをストップすることが許される状況ではない。

「実行委」への積極的参加・協力を。

（あまの・やすかず／反安保実）